

## 高等学校家庭科教科書から受け取る性別役割観

—「社会」「理科」「保健体育」「家庭」の教師を対象とした調査から—

小清水貴子\*<sup>1</sup>・大竹美登利\*<sup>2</sup>・青木 幸子\*<sup>3</sup>・石川 尚子\*<sup>4</sup>・佐藤 麻子\*<sup>5</sup>

What Kind of Gender Role Did They Recognize from the  
Home Economics Textbook ?

— By the Survey on the Teachers of Sociology, Science, Physical Education,  
and Home Economics —

Takako KOSHIMIZU · Midori OTAKE · Sachiko AOKI ·  
Naoko ISHIKAWA · Asako SATO

### Summary

Our previous study revealed the correlation and tendency between the description of Home Economics textbook and the students' development of affirmative and negative opinions towards gender role. Whether or not the teacher teaching the students has the ability to recognize any illustrations that imply ideas of gender role is critical related to providing gender equal education using such teaching materials.

We asked the teachers to describe their opinions of two pages from different textbooks. The materials described participation in child-rearing differently, with one page including a sketch of "child and mother," and the other page containing a photograph of "child and father." <sup>(1)</sup> By sex, women recognized the lurking idea of gender role in illustrations and photographs more than men. <sup>(2)</sup> By teaching subject, teachers in charge of Sociology and Home Economics tended to have a negative opinion towards gender role. <sup>(3)</sup> By experience of gender study, teachers that had experience of teaching gender at class tended to express negative opinions on gender role.

The fact that descriptions of textbook influences opinion development evidently explains the importance to deny gender role and include descriptions that have a gender equal perspective.

---

\*<sup>1</sup> 長崎大学 \*<sup>2</sup> 東京学芸大学 \*<sup>3</sup> 東京家政大学 \*<sup>4</sup> 元東京都立短期大学

\*<sup>5</sup> 東京学芸大学附属小金井中学校

## 1. 研究目的

筆者らは高校生を対象に教科書の記述から生徒がどのようなメッセージを受け取っているのかを調査分析した結果（青木他 2008, 以下「高校生調査」と記す）、第1にジェンダーの学習の有無、第2に男女の性の相違、第3に教科書の記述の相違、それらの要因により、生徒が教科書から受け取るジェンダー情報に相違があった。教科書の記述の仕方が生徒に大きな影響を与えるが、教師がどのような視点で授業を行うかによっても大きく異なっていた。それゆえ、教師が教科書の記述をどのように読み取り、授業を展開するかも重要な要素となることが明らかとなった。

近年、教育全般にわたってジェンダーに焦点をあてた独自のプログラムを組んだ実践が行われている（齋藤他 2000, 堀内・濱崎 2002, 飯塚 1999, 宇郷他 2000）。こうした独自のプログラムを組んだ教育のみならず、教科書にそって授業を実践している教師も多い実態をふまえると、教科書を通じた教育が性別役割分業などのジェンダーバイアスの再生産につながらないようにすることも重要な課題といえる。特に、性別役割分業を見直し、男女共同参画を推進する家庭科教育にあつては、教師のジェンダー観、性別役割観が重要な鍵となる。そこで本研究では、教師が教科書の記述から受け取る性別役割観を中心に調査分析することを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象および調査方法

高校生を対象とした調査内容と同様の調査を、教師に対して行った。調査対象は、高校生調査と同様、千葉県と東京都に所在する高校からランダムに2/3を選びだし、学校長宛に調査用紙を郵送した。調査用紙は、個別に封筒に入れ、「社会」「理科」「保健体育」「家庭」の担当者各1名の計4名に渡してもらった。回答記入後、個別に投函できるよう返信用封筒も4通同封した。2000年9月に送付し、2000年12月末までに返送を依頼した。

「家庭」以外で抽出した他の3つの教科は、学習内容で「家庭」と関連があり、教科の中でジェンダーに関する教育を行いやすい内容を含んでいると判断して選んだ。同一の教科に複数の担当教師がいる場合、誰が回答するかはその学校の判断に任せた。

回答は各記入者が個別に返送するが、4人全てが回答しているとは限らない。依頼高校数および回収数は表1に示したとおりである。計605校、4教科あわせて2420名に依頼したところ、306名から回答があり、回収率は12.6%であった。教科別の回収率では、家庭科が最も多く、理科が最も少なかった。

表1 調査対象者数および回収率

依頼高校数		回収数		回収率
千葉県	221	社会	79	13.1%
東京都	384	理科	58	9.6%
計	605	保健体育	70	11.6%
依頼人数		家庭	99	16.4%
計	2420	計	306	12.6%

### (2) 調査内容

高校生調査と同様に、高等学校家庭科教科書の保育のページに記載された挿絵と写真から受け取る情報について、感想を自由に記述してもらった。抽出したページは、「子どもの生活と自立」「これからの保育」の各1ページである。双方とも本文記述においては、性別役割に関する固定的な表現はなく、保育に対して両性の平等な関わりが必要であることを

主張している。「子どもの生活と自立」の「乳幼児の基本的欲求」として、生理的欲求5つ（食べる、飲む、休息、睡眠、排泄）を男の子と思われる挿絵4つ、女の子と思われる挿絵1つで表現し、社会的欲求5つ（愛情、帰属、成就、独立、承認）を大人の女性と男の子と思われる挿絵2つ、男の子と思われる挿絵2つ、男女二人の子の挿絵1つで表現している。また、「これからの保育」の「男女共同の保育」として、「子どもと父親」と題して、父親が女の子の口に食べものを運んでいる写真と、父親と男の子が相撲らしき遊びをしている写真を掲載している。以下、前者を「子どもと女性」、後者を「父親と子ども」と表記する。

調査用紙では、教科書のページを提示し、以下の設問を設定した。設問1：「ジェンダーという言葉を知っていますか。」、設問2：「『乳幼児の基本的欲求』と題する子どもと女性が描かれている挿絵があります。これについてどのように思われますか。」、設問3：「『子どもと父親』と題する写真があります。これについてどう思われますか。」、設問4では設問2・3についての自由な意見を求め、設問5では性別、ジェンダー教育をしているか否か、授業をしていると回答した場合にはその内容、さらに教員歴などの基本事項を尋ねた。

### （3）分析方法

分析にあたり、自由記述の内容にそって類似したものをグループ化した。「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述は、性別役割に関する記述と性別役割に直接関わらない記述とに大きく分類した（表2参照）。

性別役割に直接関わらない記述の中には、「不自然とは感じない」「特に何も思わない」など、短い言葉で教科書の記述を肯定していると思われるものもあった。子どもの相手として描かれている成人女性に対して、性別役割を固定した描写に同意し、性別役割を肯定しているものと判断し、これらの意見を「違和感なし」とした。「違和感なし」を除いた性別役割に関わらない記述を「Cその他の記述」のグループとした。

性別役割に関する記述は、性別役割に肯定的なものと否定的なものに分類した。

性別役割に肯定的な記述と、先に述べた「違和感なし」を「A性別役割の肯定」のグループとし、性別役割に否定的な記述を「B性別役割の否定」のグループとした。

「A性別役割の肯定」グループをさらに区分した。先の「違和感なし」は「A1違和感なし」、「ジェンダーをつくっているという意見もわかるが、やはり現状を考えると当然ではないかと思ってしまう」など、「現状」「現実」などの用語を使い、現代の社会では性別役割が存在することを肯定するものを「A2性別役割の現状肯定」、「女性には女性しかできない部分、また男性には男性しかできない部分がある……」など、伝統的な性別役割を確認し、その状況が描かれていることを評価するものを「A3伝統的性別役割の受容」、「女性は愛が大切。海のような愛。美しいものもみにくいものもすべて受け入れていく」など、男女の役割を越えて母親の愛を賞賛するものを「A4母性の承認」とした。

一方、「B性別役割の否定」は次の3つに区分した。「必ず女性でなければというものではないと思う」など、挿絵に女性だけが描かれ、それが性別役割を表現していると指摘するものを「B1性別役割表現を指摘」、「男性の挿絵があつてしかるべきだろう……」など男女双方の記載を要求したり、「子どもは女性が育てるものという固定的な決めつけが感じられる」など、性別役割の固定的表現を指摘するのみでなく、さらに性別役割を否定し、批判する意見を「B2性別役割の批判」、「乳幼児の社会的欲求に応えるのは女性（母親？）

表2 「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述のグループ化

グループの特徴		記述例
A 性別 役割 の 肯定	A 1 違和感なし	「不自然とは感じない」「自然」「特に違和感を感じない」「特に何も思わない」「特になし」
	A 2 性別役割の現状肯定	「一見ごく普通のように感じられます。ジェンダーの視点という意味では、男女が登場すべきかと思えます。しかし、現実には乳幼児は母親べったりです」「ジェンダーをつくっているという意見もわかるが、やはり現状を考えると当然ではないかと思ってしまう」「ジェンダーを考える上では、違和感を感じないわけではないが、現在この教科書を見る生徒たちのこれまで育って聞いた環境を考えると、子どもと母親の図であることで、すんなりと受け入れられるのではないかと思う」
	A 3 伝統的性別役割の受容	「伝統的な母子関係に対する定着した理解が元になっている体系を感じる」「女性には女性しかできない部分、また男性には男性しかできない部分がある。それは差別でも何でもないと思う。……特に挿絵について問題はないと思います」「愛情が父親と子だったら、父子家庭なのかと思うだろう。それが大きな問題だと思う」
	A 4 母性の承認	「女性は愛が大切。海のような愛。美しいものもみにくいものもすべて受け入れていく」「子どもと女性という意味で捉えるのではなく、子どもと母親の愛情・承認が描かれていると思う。子どもにとって愛情を感じる一番近い存在は母親ではないだろうか」「乳児にとっては父親と母親に対する欲求の種類が違うと言います。女性の柔らかい肌とスキンシップはとても大切なものです」
B 性別 役割 の 否定	B 1 性別役割への疑問	「あまり違和感というか、抵抗は感じませんでした、考えてみれば女性だけが子どもに接しているのはおかしいかなとも思います」「必ず女性でなければというものではないと思う」「不自然な感じは受けないが、ここに父親が現状だと思う」
	B 2 性別役割への批判	「男性の挿絵があつてしかるべきだろう。一方、未熟で不完全な乳児が母性的な環境を求めると言うこともあり、その母性が女性のみ割り振られることを問題視すべきである」「家庭から社会を学ぶわけですから、愛し愛される欲求などは父と母の両方を書けばよいのと思います。」「子どもは女性が育てるものという固定的な決めつけが感じられる」
	B 3 性別役割の再生産を批判	「乳幼児の社会的欲求に応えるのは女性（母親？）という無意識の先入観が著者にはある。生徒も無意識に、そのメッセージを受け取り、固定的性別役割分業の再生産に繋がると考えます」「日常生活の中でこの挿絵を見れば、特に違和感なく見過ごしてしまうかもしれない。しかし、当然そうであるからこそ、男女の役割を固定化することに奉仕してしまうことになる挿絵であると思う」「文章中の保育者としての意味が下の絵により母親のイメージが強く与えられる。できれば両親の愛情や信頼（父子という家庭環境も考慮し）を踏まえた挿絵であってほしい」「保育者＝母親という無意識の認証が書き手側にはあるように思われる」
C その 他 の 記 述	C 1 親子・人間関係	「ほほえましい」「ほほえましい。愛情に満ちあふれている」
	C 2 挿絵以外の記述	「私の授業では、世界史のヒトの誕生のところで同じ趣旨のことをやっています」「自立という概念が健常者の枠の中にあつて狭いと思います」「中学生向けの教科書だなと思います」
	C 3 アンケート批判	「どちらか一方を父親にしても良いと、この質問方法だと答えざるを得ない」
	C 4 記述方法の評価	「どのような観点についての意見かよく分かりませんが、絵自体は見やすいと思います」「単なる挿絵であり写真であり、あまり深い意味はないと思われます」「挿絵を使わなければならないという必然性がないように思います」

という無意識の先入観が著者にはある。生徒も無意識に、そのメッセージを受け取り、固定的な性別役割分業の再生産に繋がると考えます」など、性別役割の固定的表現の指摘に加え、性別役割観の再生産を批判するものを「B3 性別役割の再生産を批判」とした。

「Cその他の記述」は、「ほほえましい」など人間関係に関するものを「C1 親子・人間関係」, 「絵自体は見やすいと思います」など表現方法に対する評価を「C2 記述方法の評価」, 「私の授業では、世界史のヒトの誕生のところで同じ趣旨のことをやっています」など、挿絵以外の記述を「C3 挿絵以外に関する記述」, 「どちらか一方を父親にしても良いと、この質問方法だと答えざるを得ない」などを「C4 アンケート批判」とした。

「父親と子ども」の写真に対する記述は、「A描写に同意」する記述、「B描写に何らかの反論」する記述、「Cその他の記述」に大別することができた(表3参照)。

「A描写に同意」のグループをさらに3つに区分した。「問題ない」など短い言葉で描写を受け入れ、性別役割を否定する描写を消極的にも評価するものを「A1 消極的評価」, 「子どもにとって、父親という母親とは違う愛情を受け止めるのも大切である」など、父親としての役割を果たす形で育児参加を評価するものを「A2 特性に基づく育児参加を評価」, 「育児と遊びに父親が関わっており、良いのではないかと思う」など、父親を取り上げていることを積極的に評価するものを「A3 父親を取り上げていることを評価」とした。

「B描写に何らかの反論」のグループはさらに5つに区分した。性別役割に関係せず、「執筆者、編集者がどのような意図で掲載したものか不明」などは「B1 編集や質問の意図を批判」, 「何となく父子家庭のような印象を受ける」など、写真への違和感を表現しているものを「B2 男の育児参加に違和感」, 「男女が保育に共同で参加し」というのは理想であるが、共働きなどで現実には難しいのではないかなど、現状での父親の育児参加の困難さを主張するものを「B3 現状での父親の育児参加の困難主張」, 「男性、父親だけで内容を構成するのではなく、男と女、両親が共に協力し合って行う視点でまとめられるべきではないか」など、父親のみでなく男女の掲載を要求するものを「B4 男女の掲載要求」, 「外で元気に遊んでいるすがたとして良いと思いますが、外遊び、スポーツなどは父親の役目というイメージもあると思います」など、父親と子どもの写真が性別役割の枠内であると批判しているものを「B5 性別役割の枠内と批判」とした。

「Cその他の記述」は、「ほほえましくて良いのでは」など、親子関係・人間関係などについて記述しているものを「C1 親子関係」, 「写真には……リアリティがある」など、描写方法について述べているものを「C2 無関係な意見」とし、2つに区分した。

「父親と子ども」の写真は、一面では性別役割を否定的に記しているが、別の面では性別役割を固定化している表現にもなっていることから、「女性と子ども」の挿絵に対する記述のように、この写真を批判するものが性別役割を肯定し、同意しているものが性別役割を否定していると単純に区分することはできない。そこで、分類された自由記述を、性別役割を肯定しているか否定しているかという視点からグループ化し直したのが表4である。

「A2 特性に基づく育児参加を評価」「B2 男の育児参加に違和感」「B3 現状での父親の育児参加の困難主張」の3つは、性別役割に肯定的な意見と受け取れる。一方、「A1 消極的評価」「A3 父親を取り上げていることを評価」「B4 男女の掲載を要求」「B5 性別役割の枠内と批判」は性別役割に否定的な意見と受け取れた。なお、「特に何も思わない」という表現は、「女性と子ども」の場合は「A1 違和感なし」の性別役割を肯定している

表3 「父親と子ども」の写真に対する自由記述のグループ化

グループの特徴		記述例
A 描写に 同意	A 1 消極的評価	「問題ない」「この写真もごく普通の場面の写真として捉えました」
	A 2 特性に基づく育児参加を評価	「子どもにとって、父親という母親とは違う愛情を受け止めるのも大切である」「右側の写真からは、父親が子どもと身体を使って遊ぶことの大切さを感じる」
	A 3 父親を取り上げていることを評価	「育児と遊びに父親が関わっており、良いのではないと思う」「父親の存在が保育に必用であることをアピールしているように感じた」「子育て=母親というイメージが強いので、父親の写真がでていることは、とても良いのではないのでしょうか」
B 描写に 何らかの 反論	B 1 編集や質問の意図を批判	「執筆者、編集者がどのような意図で掲載したものか不明」「子どもと男性のどのような観点での写真についてか良くわかりません」「最近片親(母子家庭)の家庭が多いのであまり取り扱いたくない」「父親と表記してあるからには、男性の写真になるのは当然ではないか」「子どもと父親とわざわざタイトルをつけなくても良いと思う」
	B 2 男の育児参加に違和感	「子どもにとって大切なのは母性である。まず、“母親ありき”だ。写真は不自然でグロテスク、母親と子どもであるべきだ」「これはあまり見たことがないような風景をいれたような不自然さがあります」「何となく父子家庭のような印象を受ける」
	B 3 現状での父親の育児参加の困難主張	「男女が保育に共同で参加し」というのは理想であるが、共働きなどで現実には難しいのではないか」「保育が単に母親のみのものではなく、両性が一致してあたるべきと思うが、育児休暇は男性が取りにくい状況になっている」
	B 4 男女の掲載要求	「男女の共同保育という見出しにするならば、父親だけでなく、母親(女性)も共に写っていた方が自然ではないか」「男性、父親だけで内容を構成するのではなく、男と女、両親が共に協力し合って行う視点でまとめられるべきではないか」「女性と男性が共に協力して育児をしている写真の方がよいと思う」
	B 5 性別役割の枠内と批判	「女の子に食事、男の子に相撲というのは、男性の子育て参加という問題以前に、子どものジェンダーが問われる気がします」「外で元気に遊んでいるすがたとして良いと思いますが、外遊び、スポーツなどは父親の役目というイメージもあると思います」
C その他の 記述	C 1 親子関係	「ほほえましくて良いのでは」「周りの人の愛情に包まれて育っていくという印象の絵や写真だと思います」
	C 2 無関係な意見	「写真には……リアリティがある」

表4 「父親と子ども」の写真に対する自由記述の再グループ化

性別役割に肯定的な意見	A 2	特性に基づく育児参加を評価
	B 2	男の育児参加に違和感
	B 3	現状での父親の育児参加の困難主張
性別役割に否定的な意見	A 1	消極的評価
	A 3	父親を取り上げていることを評価
	B 4	男女の掲載を要求
性別役割に関わりのない意見	B 5	性別役割の枠内と批判
	B 1	編集や質問の意図を批判
	C 1	親子関係
	C 2	無関係な意見

意見とし、「父親と子ども」の場合は「A1 消極的評価」の性別役割に否定的意見とした。同じ表現でも両者の評価を逆のものと判断したのは、教科書の表現が、前者は女性が育児に関わるという伝統的な性別役割の場面を、後者は父親が育児に関わるという性別役割を否定する場面を描いており、それを受容する意見であったからである。

### 3. 結果と考察

#### (1) 調査対象者の特徴

調査対象者の特徴は、性別は男性が48.4%、女性が50.7%と、ほぼ半々であった。2000年の学校教育基本調査によれば、高等学校の教員は男74.4%、女25.6%であり、本結果ではこれより女性の割合が高かった。教科別では、「社会」や「理科」の対象者は男性の割合が高く、「家庭」の対象者は女性の割合が96.0%と高い。女性の比率が高い家庭科の教員の回収率が高かったことが、対象者の女性の割合が高いことの理由といえる（表5参照）。

表5 調査対象者の特徴

		担当教科	合計	社会	理科	保体	家庭	
		(人)	306	79	58	70	99	
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	
性別	男性	148	48.4%	73.4%	75.9%	61.4%	3.0%	
	女性	155	50.7%	26.6%	24.1%	35.7%	96.0%	
	NA	3	1.0%	0.0%	0.0%	2.9%	1.0%	
教員歴階層別(年)	～9	46	15.0%	5.1%	10.3%	17.1%	24.2%	
	10～19	123	40.2%	49.4%	55.2%	25.7%	34.3%	
	20～29	87	28.4%	29.1%	19.0%	37.1%	27.3%	
	30～	39	12.7%	15.2%	15.5%	14.3%	8.1%	
	NA	11	3.6%	1.3%	0.0%	5.7%	6.1%	
「ジェンダー」を知っているか	知っている	215	70.3%	82.3%	46.6%	48.6%	89.9%	
	聞いたことはあるがあまり知らない	35	11.4%	8.9%	20.7%	14.3%	6.1%	
	知らない	44	14.4%	5.1%	31.0%	31.4%	0.0%	
	NA	12	3.9%	3.8%	1.7%	5.7%	4.0%	
ジェンダーに関する授業を行っているか	行っている	98	32.0%	34.2%	8.6%	18.6%	53.5%	
	生徒の関心	とても興味を持っている	13	4.2%	6.3%	1.7%	0.0%	7.1%
		わりと興味を持っている	69	22.5%	25.3%	6.9%	14.3%	35.4%
		あまり興味を持っていない	11	3.6%	1.3%	0.0%	1.4%	9.1%
		その他(男子の反発もある)	1	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%
	NA	4	1.3%	1.3%	0.0%	2.9%	1.0%	
	行っていない	203	66.3%	65.8%	84.5%	81.4%	45.5%	
NA	5	1.6%	0.0%	6.9%	0.0%	1.0%		

教員歴階層別では、10年以上20年未満が最も多く、続いて20年以上30年未満と、比較的ベテランの教師が多かった。

教科別では、「社会」は教員歴の短い教師は少なく、10～19年の中堅や20～29年のベテランが多い。「理科」は10～19年の中堅が多く、「保健体育」は20～29年のベテランが、「家庭」は9年以下の教員歴の短い教師が比較的多かった。

「ジェンダー」という言葉を知っているかどうかでは、7割をこえる者が知っており、

知らないは14.4%とわずかだった。高校生調査で、ジェンダーの言葉を知っている生徒が26.8%で、知らない生徒が51.9%いたことと相違している。教科別では、「社会」と「家庭」を担当している教師に知っている者が多かった。

ジェンダーに関する授業を行っているかどうかを尋ねたところ、全体では32.0%の教師が、何らかの形でジェンダーに関する授業を行っていた。特に「社会」と「家庭」は、授業を行っている教師が多く、「家庭」では53.5%と半数を超え、つぎに「社会」の34.2%が多かった。逆に「理科」では9%弱の教師しか、ジェンダーに関する授業を行っていなかった。「家庭」はジェンダーに関する授業が行われやすい教科であることや、学習指導要領の改訂の趣旨に「男女共同参画社会の推進」を担う教科と位置づけられていることを反映していると思われる。ジェンダーの言葉を知っている教師は「社会」と「家庭」で多かったが、単に言葉を知るにとどまらず、積極的に授業に取り入れていることが読み取れた。

ジェンダーに関する授業をしている学年は、「社会」で3年生、「家庭」では1年生が多かった。「社会」のなかでも倫理や政治経済は3年生に行われることが多く、家庭科は1年生で開設されることが多く、それを反映していると思われる。授業に割り当てる時間は年2～4時間が最も多く、教科による相違はなかった。どの教科でも、ジェンダーに関する授業を行える時間数には限界があると思われる。授業に対する生徒の関心の程度は、「わりと興味を持っている」と回答した教師が22.5%で、最も多かった。

## (2) 「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述

「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述回答のグループ別割合を表6に示した。

### ① 総計にみる特徴

総計では、「A性別役割の肯定」43.1%、「B性別役割の固定化を批判」が48.4%と約半々で、「Cその他の記述」は4.9%と少数であった。「A性別役割の肯定」のなかでは「A1違和感なし」が19.0%と最も高く、続いて「A4母性の承認」が11.1%であった。

グループの分け方が相違するので同列には比較できないが、高校生調査では、「別に」「自然」などの「A短い表現」で「A1消極的評価」や「A2受容相手として追認」する記述が24.6%であったことと比較すると、教師が短い言葉で表現している「A1違和感なし」は19.0%と低く、生徒より自分の言葉で意見を主張している特徴がみられた。また、生徒の「A短い表現」と「C性別役割を評価」を合計した性別役割を肯定する記述が51.4%であったことと比べると、教師の「A性別役割を肯定」する記述は43.1%と低かった。しかし生徒の「C3母親役割を評価」に近い意見である、教師の「A4母性の承認」の割合は11.1%と、生徒と大差はなく、教師の方は母性をより強調し、積極的に評価していた。

総じて、教師は自分の言葉で意見を述べているものが比較的多く、また、「性別役割の肯定」は生徒より少ないものの、母性に対しては生徒より積極的に評価する傾向にあった。

「B性別役割の否定」では、「B2性別役割への批判」が24.5%と多く、これは小分類のなかでは最も高い割合を占めていた。さらに「B3性別役割の再生産と批判」は10%を越えており、高校生調査では、性別役割に否定的な記述は「B性別役割への疑問」12.0%のみであったことと比較すると、教師は単なる否定に止まらず、教育する視点から性別役割の再生産にまで踏み込んで述べていることが特徴的であった。

表6 「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述回答のグループ別割合

対象者の 種別	総 計 (人)	総 計 (%)	A性別役割の肯定				B性別役割の否定				Cその他の記述				N A			
			A 合 計 (%)	A1	A2	A3	A4	B 合 計 (%)	B1	B2	B3	C 合 計 (%)	C1	C2		C3	C4	
				違 和 感 な し	性 別 役 割 の 現 状 肯 定	伝 統 的 性 別 役 割 の 受 容	母 性 の 承 認		性 別 役 割 へ の 疑 問	性 別 役 割 の 批 判	性 別 役 割 の 再 生 産 と 批 判		親 子 ・ 人 間 関 係	挿 絵 以 外 の 記 述		ア ン ケ ー ト 批 判	記 述 方 法 の 評 価	
総 計	306	100.0	43.1	19.0	4.9	8.2	11.1	48.4	13.7	24.5	10.1	4.9	1.0	2.0	0.3	1.6	3.6	
性 別	男性	148	100.0	54.1	25.0	5.4	8.8	14.9	35.1	11.5	18.9	4.7	6.8	1.4	3.4	0.0	2.0	4.1
	女性	155	100.0	33.5	13.5	4.5	7.7	7.7	61.3	16.1	29.7	15.5	2.6	0.0	0.6	0.6	1.3	2.6
	N A	3	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	33.3
担 当 教 科	社会	79	100.0	35.4	10.1	3.8	10.1	11.4	54.4	17.7	26.6	10.1	5.1	0.0	2.5	0.0	2.5	5.1
	理科	58	100.0	55.2	34.5	3.4	5.2	12.1	41.4	13.8	24.1	3.4	1.7	1.7	0.0	0.0	0.0	1.7
	保健体育	70	100.0	55.7	22.9	10.0	5.7	17.1	32.9	8.6	18.6	5.7	8.6	1.4	5.7	0.0	1.4	2.9
	家庭	99	100.0	33.3	14.1	3.0	10.1	6.1	58.6	14.1	27.3	17.2	4.0	1.0	0.0	1.0	2.0	4.0
教 歴 階 層	～9	46	100.0	50.0	17.4	8.7	15.2	8.7	43.5	21.7	13.0	8.7	4.3	0.0	2.2	2.2	0.0	2.2
	10～19	123	100.0	46.3	23.6	3.3	8.1	11.4	46.3	13.8	24.4	8.1	2.4	0.0	0.0	0.0	2.4	4.9
	20～29	87	100.0	40.2	19.5	2.3	6.9	11.5	51.7	8.0	27.6	16.1	5.7	0.0	3.4	0.0	2.3	2.3
	30～	39	100.0	33.3	7.7	10.3	2.6	12.8	56.4	17.9	30.8	7.7	10.3	5.1	5.1	0.0	0.0	0.0
	N A	11	100.0	36.4	9.1	9.1	9.1	9.1	36.4	9.1	27.3	0.0	9.1	9.1	0.0	0.0	0.0	18.2
授 業	している	98	100.0	33.7	8.2	6.1	11.2	8.2	56.1	17.3	22.4	16.3	4.1	0.0	2.0	0.0	2.0	6.1
	していない	203	100.0	47.8	24.1	3.9	6.9	12.8	44.8	12.3	25.1	7.4	4.9	1.0	2.0	0.5	1.5	2.5
	N A	5	100.0	40.0	20.0	20.0	0.0	0.0	40.0	0.0	40.0	0.0	20.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0

② 性別にみる特徴

性別で見ると、「A性別役割の肯定」は男性54.1%、女性33.5%と、男性が高い。その内訳は、「A1違和感なし」は男性25.0%、女性13.5%、「A4母性の承認」は男性14.9%、女性7.7%と、どちらも約2倍程度、男性の方が高かった。一方、「B性別役割の否定」は逆に、男性35.1%、女性61.3%と女性が高く、なかでも「B3性別役割の再生産と批判」するものは、男性4.7%、女性15.5%で、女性は男性の約3倍となっていた。このことは、男性の方が性別役割に肯定的な傾向が、女性の方が否定的な傾向があることを示している。

③ 担当教科別特徴

担当教科別では、「社会」と「家庭」、「理科」と「保健体育」が同じ傾向を示していた。すなわち、「A性別役割の肯定」をしている教師は、「理科」と「保健体育」でそれぞれ55.2%、55.7%で、「社会」と「家庭」の35.4%、33.3%と比較して高く、逆に「B性別役割の否定」

は、「理科」と「保健体育」は41.4%、32.9%で、「社会」と「家庭」の54.4%、58.6%と比較して低かった。なお、「保健体育」での「B性別役割の否定」は、「理科」と比べても低い割合であった。

「A性別役割の肯定」は、「A4母性の承認」に特徴があり、このグループでは、「社会」「理科」「保健体育」がそれぞれ11.4%、12.1%、17.1%と二桁の割合であるのに対し、「家庭」は6.1%と一桁台であった。こうした内容の記述に限っては、「社会」でもその割合は必ずしも低くはなく、「保健体育」では、他教科の教師より特に高い割合を示していた。

また、「B性別役割の否定」では、「B3性別役割の再生産と批判」に特徴があり、「理科」と「保健体育」は3.4%、5.7%と低く、「社会」が10.1%、「家庭」は17.2%と高かった。「保健体育」の教師が性別役割に肯定的で、「家庭」の教師が批判的な特徴がみられた。

#### ④ 教員歴階層別特徴

教員歴階層別では、「A性別役割の肯定」の割合は、教員経験が短いほど高く、9年以下の教員歴が短い教員で50.0%、10～19年の中堅で46.3%、20～29年のベテランで40.2%、30年以上の超ベテランで33.3%であった。「A性別役割の肯定」では、9年以下の教師は「A3伝統的性別役割の受容」が15.2%、10～19年の中堅の教師では「A1違和感なし」が23.6%、30年以上の超ベテラン教員では「A4母性の承認」が12.8%と、それぞれ高くなる特徴があった。教員経験が短いほど性別役割に肯定的であり、ベテラン教師は総体として性別役割の肯定は少ないが、そのわりには女性役割を象徴する母性観を持つものが多いことが特徴としてあげられる。

「B性別役割の否定」の割合は、「A性別役割の肯定」と逆に、教員経験が長いほど高く、9年以下で43.5%、10～19年で46.3%、20～29年で51.7%、30年以上で56.4%であった。「B性別役割の否定」のなかでは、9年以下の教員歴の短い教師では「B1性別役割への疑問」が21.7%と高く、20～29年のベテラン教師では「B3性別役割の再生産と批判」が16.1%と他の教員歴階層の教員と比較して高いという特徴があった。すなわち、教員歴の短い教師は、性別役割に対して疑問程度で止まっているが、ベテランではさらに踏み込んで、性別役割の再生産にまで言及しているという特徴があった。

#### ⑤ ジェンダーに関する授業を行っているか否か

ジェンダーに関する授業を行っている（経験あり）か否か（経験なし）別では、経験ありの方が「A性別役割の肯定」の割合が低く、「B性別役割の否定」の割合が高かった。「A性別役割の肯定」では、経験あり33.7%、経験なし47.8%であり、「B性別役割の否定」では、経験あり56.1%、経験なし44.8%であった。

「A性別役割の肯定」のなかでは、「自然」など短い言葉で表現している「A1違和感なし」の記述をしたものが、経験ありは8.2%、経験なしは24.1%と、後者の方が3倍ほど高く、性別役割に肯定的で、回答も短い言葉で簡単にしているものが多いという特徴が明らかとなった。また、女性の母性を強調して男性との相違に言及している「A4母性の承認」の記述をしたものも、経験あり8.2%、経験なし12.8%と、後者の方が高かった。すなわち、授業経験のない教師は、女性の母性を強調して評価しているものが多いといえる。

「B性別役割の否定」では、経験ありは「B3性別役割の再生産と批判」が16.3%で、

経験なしの2倍以上で、性別役割の再生産にセンシティブであることが明らかになった。

### (3) 「父親と子ども」の写真に対する自由記述

「父親と子ども」の写真に対する自由記述回答のグループ別割合を表7に示した。

#### ① 総計にみる特徴

総計では、「性別役割に肯定的な意見」が21.6%、「性別役割に否定的な意見」が69.0%と否定的な意見が多く、「C性別に関わりのない意見」は7.5%と少数であった。「子どもと女性」では肯定と否定が半々だったことと比較すると、「父親と子ども」では性別役割に否定的な意見が多い。これは「自然」「問題ない」など短い言葉で表現しているものを、「子どもと女性」では性別役割に肯定的とし、「父親と子ども」では否定的としたことに一因がある。しかし、それを除いた割合は、「子どもと女性」で性別役割に肯定的なもの24.1%、否定的なもの48.4%、「父親と子ども」で性別役割に肯定的なもの21.6%、否定的なもの49.1%と、多少後者の方が多くことから、教科書の描写が意見に影響しているといえる。

「性別役割に肯定的な意見」の「B2男の育児参加に違和感」「B3現状での父親の育児参加の困難主張」「A2特性に基づく育児参加を評価」の記述では、大きな相違はなかった。

グループの分け方が相違するので同列には比較できないが、生徒の調査結果と比較すると次のような特徴があった。

「性別役割に肯定的な意見」では、教師の「B2男の育児参加に違和感」は8.8%であるのに対して、生徒の「C父親の育児参加に違和感」が12.2%、教師の「A2特性に基づく育児参加を評価」は6.9%に対して、生徒の「B3性別役割を前提とした育児参加評価」と「B4特性に基づく育児参加を評価」の合計が16.6%と、教師の方が性別役割を肯定しているものは少なかった。また、教師は労働時間等の関係で「B3現状での父親の育児参加の困難主張」が5.9%みられたが、生徒にはこうした意見はなかった。現実の社会での実感を反映した意見として、教師の特徴がみられた。

「性別役割に否定的な意見」では、「A3父親を取り上げていることを評価」した教師は31.4%であり、生徒の「B2父親の育児参加評価」の7.3%と比較して非常に高かった。また、教師には「B5性別役割の枠内と批判」する意見が12.7%あったが、生徒にはこうした意見はなかった。教師は、「父親と子ども」の写真を父親の育児参加を強調するものとして肯定的に捉えるだけでなく、性別役割を否定する写真としては不十分であることを指摘していた。こうした批判的な視点も、教師の特徴としてあげられる。

#### ② 性別にみる特徴

性別で見ると、「性別役割に肯定的な意見」は男性27.7%、女性16.1%と、男性の割合が高く、なかでも「B2男の育児参加に違和感」は男性10.1%、女性7.7%、「A2特性に基づく育児参加を評価」は男性10.1%、女性3.9%と、男性の割合がとりわけ高かった。「性別役割に否定的な意見」は逆に男性60.1%、女性78.1%と女性の割合が高く、なかでも「B5性別役割の枠内と批判」は、男性8.1%、女性17.4%で、女性は男性の2倍だった。男性は性別役割に肯定的で、女性は否定的な意見を持つ傾向を示している。

表7 「父親と子ども」の写真に対する自由記述回答のグループ別割合

対象者の 種別	総 計 (人)	総 計 (%)	性別役割に 肯定的な意見			性別役割に 否定的な意見				性別役割に 関わりのない意見			N A				
			小 計 (%)	A2	B2	B3	小 計 (%)	A1	A3	B4	B5	小 計 (%)		B1	C1	C2	
				育特 児性 参加 を基 づ く 評価	男の 育児 参加 に違 和感	参現 加状 での 困父 難親 の育 児		消 極 的 評 価	い父 親を 取り 上げ て 評価	男 女 の 掲 載 要 求	性 別 役 割 の 枠 内 と 批 判			編 集 や 質 問 の 意 図 を 批 判	親 子 関 係	無 関 係 な 意 見	
総 計	306	100.0	21.6	6.9	8.8	5.9	69.0	19.9	31.4	4.9	12.7	7.5	3.3	2.6	1.6	2.0	
性別	男性	148	100.0	27.7	10.1	10.1	7.4	60.1	21.6	27.0	3.4	8.1	9.5	4.1	4.1	1.4	2.7
	女性	155	100.0	16.1	3.9	7.7	4.5	78.1	18.7	35.5	6.5	17.4	5.2	2.6	0.6	1.9	0.6
	N A	3	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	0.0	33.3	0.0	33.3	0.0	33.3
担当 教科	社会	79	100.0	19.0	3.8	7.6	7.6	68.4	20.3	26.6	6.3	15.2	8.9	3.8	1.3	3.8	3.8
	理科	58	100.0	24.1	3.4	17.2	3.4	69.0	27.6	25.9	8.6	6.9	6.9	1.7	5.2	0.0	0.0
	保健体育	70	100.0	30.0	17.1	7.1	5.7	60.0	18.6	31.4	5.7	4.3	7.1	4.3	2.9	0.0	2.9
	家庭	99	100.0	16.2	4.0	6.1	6.1	75.8	16.2	38.4	1.0	20.2	7.1	3.0	2.0	2.0	1.0
教歴 階層	～9	46	100.0	28.3	8.7	13.0	6.5	58.7	17.4	21.7	0.0	19.6	10.9	2.2	6.5	2.2	2.2
	10～19	123	100.0	17.9	4.1	8.1	5.7	74.0	22.8	32.5	6.5	12.2	6.5	5.7	0.8	0.0	1.6
	20～29	87	100.0	18.4	5.7	6.9	5.7	75.9	19.5	41.4	5.7	9.2	3.4	1.1	0.0	2.3	2.3
	30～	39	100.0	30.8	12.8	12.8	5.1	56.4	15.4	23.1	5.1	12.8	12.8	2.6	7.7	2.6	0.0
	N A	11	100.0	27.3	18.2	0.0	9.1	45.5	18.2	9.1	0.0	18.2	18.2	0.0	9.1	9.1	9.1
授 業	行っている	98	100.0	16.3	5.1	7.1	4.1	75.5	17.3	38.8	2.0	17.3	5.1	2.0	0.0	3.1	3.1
	行っていない	203	100.0	24.1	7.9	9.4	6.9	66.0	21.2	28.1	6.4	10.3	8.4	3.9	3.4	1.0	1.5
	N A	5	100.0	20.0	0.0	20.0	0.0	60.0	20.0	20.0	0.0	20.0	20.0	0.0	20.0	0.0	0.0

## ③ 担当教科別特徴

担当教科別では、「性別役割に肯定的な意見」は、「理科」24.1%、「保健体育」30.0%であり、「社会」19.0%、「家庭」16.2%と比較して高かった。特に「理科」は「B2男の育児参加に違和感」が17.2%、「保健体育」は「A2特性に基づく育児参加を評価」が17.1%と高かった。

「性別役割に否定的な意見」は、「社会」68.4%、「理科」69.0%、「保健体育」60.0%、「家庭」75.8%と、「家庭」の教師の割合が高い傾向にあるが、大差はなかった。これは「子どもと女性」で「理科」と「保健体育」が「B性別役割の否定」が少なかった傾向と相違していた。ただし、「B5性別役割の枠内と批判」する意見は、「社会」15.2%、「家庭」20.2%で、「理科」6.9%、「保健体育」4.3%と比較して高く、「社会」と「家庭」の教員の方が性別役割に敏感である傾向は、「子どもと女性」の挿絵の結果と同様の傾向であった。

#### ④ 教員歴階層別特徴

教員歴階層別では、「性別役割に肯定的な意見」の割合はU字型を示し、9年以下で28.3%、10～19年で17.9%、20～29年で18.4%、30年以上で30.8%と、教員経験が短いものは高いが、中堅層で低く、30年以上の超ベテランで高くなっていった。

「性別役割に肯定的な意見」では、9年以下の教師は「B2男の育児参加に違和感」が13.0%と他の教員歴階層より高く、30年以上の超ベテラン教師では「B2男の育児参加に違和感」と「A2特性に基づく育児参加を評価」がそれぞれ12.8%と高かった。すなわち、教員歴の短い教師は違和感程度の肯定が多く、強い主張はないこと、超ベテラン教師は、性別の特性を強調した性別役割観を持っているものも多いという特徴があった。

「性別役割に否定的な意見」は、「性別役割に肯定的な意見」と逆に、山型を示し、9年以下で58.7%、10～19年で74.0%、20～29年で75.9%、30年以上で56.4%であり、中堅の教師に否定的な意見が多かった。

「性別役割に否定的な意見」のなかでは、10～19年の中堅の教師でも、20～29年のベテラン教師でも「A3父親を取り上げていることを評価」するものがそれぞれ32.5%、41.4%と高かったが、10～19年の中堅の教師ではそれに加えて「A1消極的評価」も高く、これが「性別役割に否定的な意見」の割合を高めている要因でもあった。

#### ⑤ ジェンダーに関する授業を行っているか否か

ジェンダーに関する授業を行っている（経験あり）か否か（経験なし）別では、経験ありの方が「性別役割に肯定的な意見」の割合が低く、「性別役割に否定的な意見」の割合が高かった。「性別役割に肯定的な意見」では、経験あり16.3%、経験なし24.1%であり、「性別役割に否定的な意見」では、経験あり75.5%、経験なし66.0%であった。

「性別役割に肯定的な意見」では、各項目で経験なしの方がその割合が少しずつ高かった。「性別役割に否定的な意見」の中で、経験ありの教師は「A3父親を取り上げていることを評価」と「B5性別役割の枠内と批判」がそれぞれ38.8%、17.3%と、経験なしの教師の28.1%、10.3%より高かった。授業を行っている教師の方が、父親の育児参加に積極的な評価を示し、性別役割の再生産にセンシティブになっていることが明らかになった。

### 4. まとめ

高校生調査では、家庭科教科書の描写によって、高校生の性別役割を肯定する意見と否定する意見の傾向が相違していた。生徒を教える立場の教師が、教科書の描写に性別役割分業観が潜んでいるか否かを認識できるかは、男女平等な方向を持った教育を行えるか否かに関わる重要な問題である。そこで、高校生調査と同様な調査を、教師に対して行い分析した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 教師の方が生徒より、教科書の記述が固定的な性別役割を描写していることに気づき、その性別役割に否定的なものが多かった。しかし、肯定的に捉える教師もおり、生徒と同様、教科書の表現をそのまま受け入れる傾向もみられた。「子どもと女性」の挿絵に対しては性別役割を肯定する記述が、「父親と子ども」の写真に対しては性別役割を否定する記述が多かった。すなわち、教科書に性別役割を否定する描写が

- なされているときの方が、教師はそれを推進する姿勢をとるようになるといえる。
- (2) 性別では、女性は男性より性別役割に否定的な意見が多かった。特に「父親と子ども」の写真は一見、性別役割を否定する表現と捉えられる。しかしそのなかに、男女の特性といった性別役割を指摘し、生徒の性別役割を再生産するメッセージになると批判的にみる視点は、女性の方から多くなされた。こうしたことから、女性の方が性別役割観に敏感であることが示唆された。
  - (3) 担当教科別では、「社会」や「家庭」では性別役割を否定する意見が多かったのに対し、「理科」や「保健体育」では肯定する意見が多かった。生物学的性差や体力差などの性差が学習内容と密接に結びついている「理科」や「保健体育」の教科の性格と、労働の性別分担など社会的文化的性差（ジェンダー差）が学習内容と深く結びついている「社会」や「家庭」の教科の性格が、それぞれの特徴に反映していると思われる。そのことが、ジェンダーに関する授業が「社会」や「家庭」で多くなされていることの背景にあるともいえる。
  - (4) 教員歴階層では、「子どもと女性」の場合は、経験の短い教師ほど性別役割に肯定的で、「父親と子ども」の場合は、経験が短いものとベテランの教師が性別役割に肯定的であった。超ベテラン教師では、性別役割を固定的に示した「子どもと女性」の挿絵には批判的にもかかわらず、「父親と子ども」の写真には違和感を覚えると回答した教師が多かった。
  - (5) ジェンダーに関する授業を行っているか否かによれば、授業を行っている教師の方が性別役割に否定的であり、行っていない教師の方が肯定的であった。性別役割に否定的な方がジェンダーに敏感で、ジェンダーに関する授業を行う傾向にあると考えられる。

以上、教師にも性別役割に否定的な意見を示すものと肯定的な意見を示すものがあり、性別や担当教科、教員歴などによって相違していた。男女共同参画の推進という観点から、生徒の平等意識を育てる立場である教師が、どのような性別役割観を持っているかは重要である。教師の性別役割観は、性別や担当教科、教員歴などにより相違していたが、同時に教科書の描写によっても左右されていた。教科書の描写は、男女平等な教育の推進にあたって、重要な問題であるといえる。さらに、同じ描写でも、性別役割を肯定する教師がいた一方、生徒の性別役割観を再生産すると指摘する教師もいた。教員養成に際して、性別役割観に敏感な教師を育てることも、男女平等な観点を持った生徒の教育に不可欠であり、男女共同参画社会の形成に資する家庭科教師にあっては、重要な課題であるといえる。

#### 謝 辞

本研究を報告するにあたって、日本家庭科教育学会関東地区会、調査にご協力頂いた各位、故飯塚和子氏に深甚なる謝意を申し上げる。

#### <引用文献>

青木幸子・小清水貴子・大竹美登利・石川尚子・佐藤麻子、高校生が家庭科教科書から受

- け取るジェンダー情報—高校生を対象とした調査から—, 東京家政大学人間文化研究所紀要 第2集, 2008. 3月(発行予定)
- 遠田瑞穂・吉野真弓・佐藤麻子・大竹美登利, 中学校「技術・家庭」教科書のジェンダーバイアスに関する分析—家庭分野について—, 日本家庭科教育学会誌 44(2), 2001, pp.117-126
- 堀内かおる・濱崎タマエ, <ジェンダーに関する授業>の生成と変容—子どもの学びと教師の関与をめぐって— 日本教師教育学会年報 10, 2002, pp.126-135
- 飯塚和子・小谷教子, 家庭科教育とジェンダー—男女必修の家庭科教育と家族領域学習実践報告—, 日本大学習志野高等学校研究紀要創設70周年記念号, 1999, pp.87-105
- 飯塚和子, 高校生のジェンダー意識の形成と学校教育—男女共同参画社会に向けた家庭科教育—, 平成11年度(財)東京女性財団助成金研究報告書, 2000
- 飯塚和子・青木幸子・岡村貴子・大竹美登利, 高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第1報)—家庭経営領域について—, 日本家庭科教育学会誌 44(2), 2001, pp.127-136
- 石川尚子・大竹美登利・堀内かおる・由比ヨシ子, 小学校家庭科教科書のジェンダー分析, 日本家庭科教育学会関東地区会誌 第2号, 1999, pp.98-105
- 増田あけみ・斎藤美保子・杉山由美子・大竹美登利, 高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第3報)—保育領域について—, 日本家庭科教育学会誌 44(3), 2001, pp.272-279
- 中山節子・石川五月・飯塚和子・大竹美登利, 高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第2報)—被服, 食物, 住居領域について—日本家庭科教育学会誌 44(2), 2001, pp.137-145
- 斉藤弘子・鶴田敦子・朴木佳緒留・丸岡玲子・望月一枝・和田典子, ジェンダー・エクイティを拓く家庭科, かもがわ出版 2000
- 宇郷香織・小谷教子・飯塚和子, 「男女共同参画社会の推進」に対応した高等学校家庭科の授業実践: 家族領域におけるジェンダーに関するテーマでの新聞作り, 日本家庭科教育学会誌 43(1), 2000, pp.47-50